

O-270

破壊赤血球が著明高値な貧血を契機に発見された十二指腸GISTの1例

原健三¹、根本絵美¹、小野優香¹、松清靖¹、青木貴哉¹、宮澤秀明¹、
篠原正夫¹、石井耕司¹、藤澤理沙人^{1,2}

¹JCHO 東京蒲田医療センター、²東邦大学医療センター大森病院

症例は50歳の男性。受診契機：貧血精査。現病歴：20XX年11月X日の夜から体幹部に皮疹が出現、10日後に当院皮膚科を受診した。皮膚科で帯状疱疹の診断されたが、同日に施行された血液検査で末梢血中のHgb値が8.8g/dLと低値であるため当院の内科外来を紹介された。既往歴：特になし。家族歴：特になし。嗜好品：喫煙なし、飲酒はビール1Lとチューハイ350mlを月に数回。内服薬：なし。身体学的所見：身長：169cm、体重：61.6kg、意識清明、血圧：129/53mmHg、脈拍：72回/分、整。眼瞼結膜貧血あり、眼球結膜黄疸なし。胸部に異常所見なし。腹部：平坦かつ軟、圧痛なし、腫瘤触知せず。下肢浮腫なし。血液・生化学的検査所見：RBC：422×10⁴/μL、Hgb：8.8g/dL、破壊赤血球：16.18×10⁴/μL、網状赤血球：4.52×10⁴/μL、PLT：37.5×10⁴/μL、血清鉄：25μg/dL、TIBC：505μg/dL、フェリチン：4.2ng/mL、CEA：2.0ng/mL、CA19-9：2.8U/mL、SIL2R：198U/mL、便潜血：陰性。上部消化管内視鏡検査では十二指腸下行部に中心陥凹した7cm大の隆起性病変あり、陥凹病変から4か所生検したが確定診断に至らなかった。腹部造影CT検査上、動脈相で内部に不均一に造影される多血性腫瘍あり、主な栄養血管は胃十二指腸動脈であった。十二指腸GISTを疑ってEUS-FNAを施行しC-kit強陽性、CD34一部陽性、desimm陰性、S-100は陰性で組織学的にGISTと診断された。東邦大学消化器外科で幽門輪温存腫頭部十二指腸切除術が行われ、腫瘍サイズは70mm×57mm×48mmの腫瘍であった。手術後に貧血は改善し、破壊赤血球も著明に低下した。

【まとめ】受診契機となった破壊赤血球が著増した鉄欠乏性貧血はGIST切除後から改善していることから、赤血球が多血性腫瘍内で破壊されていたものと思われる。GISTの発見契機が貧血であることは稀ではないが、多血性腫瘍内で赤血球が破壊されていることが示唆される興味深い症例であり報告する。

O-271

産後1ヶ月でのエジンバラ産後うつ病質問票の値に影響を与える因子

吉原一、河野照子、松澤見代、西山香織、馬場征一、新井正秀

JCHO相模野病院 母子センター

目的：近年周産期メンタルケアの重要性が、認識されています。今回我々は当院で分娩した初産婦を対象に妊娠中と産褥期にKesslerが開発した鬱病と不安障害のスクリーニング指数であるK6の値と、産後1ヶ月のエジンバラ産後うつ病質問票（EPDS）の値との関連を検討しました。

対象：2017年4月から2018年8月の間に当院母子センターで妊娠、分娩の管理を行った妊娠36週から41週の初産婦129例を対象としました。

方法：妊娠初期と産褥の入院中にK6の質問紙を使用して、対象の妊婦の鬱病と不安状態を評価しました。また産後1ヶ月健診の際にEPDSを用いて、産後のうつ状態の評価を行いました。

結果：対象となった症例のうち、経陰分娩例が108例、帝王切開例が21例でした。帝王切開の適応は、骨盤位5例、遷延分娩4例、筋腫手術後妊娠4例、筋腫合併妊娠4例、妊娠高血圧症2例、NRFS2例でした。また21例中8例が不妊治療後の妊娠でした。経陰例では初期と産褥期のK6の値とEPDSの間にそれぞれ相関係数0.46と0.42の有意な正の相関が認められました。一方帝王切開ではこのような相関は全く認められず、相関係数はそれぞれ0.05と-0.03でした。この違いの原因を調べるために経陰群と帝王切開群を比較しました。年齢が帝王切開群で36.4±4.0歳で経陰群の32.8±4.7歳よりも有意に高齢でした。また初期と産褥期のK6の値が経陰群では3.6±4.1、3.8±3.0と有意差がないのに比べて、帝王切開群では3.3±3.3から4.9±3.2と有意に増加していました。

結論：帝王切開になった症例では、産褥期のK6の値が妊娠中に比べて有意に増加していました。ただ妊娠、産褥期のK6の値とEPDSの間に有意な相関が認められないことから、妊娠産褥期の鬱病、不安傾向とは別に帝王切開で分娩に至ったこと自体が、産後1ヶ月のEPDSの値に大きく影響している可能性が考えられました。

O-272

中規模病院における炎症性腸疾患のチーム医療と地域医療貢献

三枝陽一¹、今泉弘¹、市川奈津子²、今崎貴生¹、矢内原智子¹、山内貴雄¹、
池田宏美¹、高橋遼¹、永岡未来¹、石井隆司¹、片山卓爾¹、山下雅子¹、
影山聡¹、金明哲¹、井廻佑介¹、谷本和巳²、片平美穂²、大井田正人¹、野田吉和¹
¹JCHO相模野病院 医師、²管理栄養士

【目的】炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎、クローン病）は日本で一番多い難病である。特定疾患医療受給者証交付件数でみると2014年末に潰瘍性大腸炎は170,781人、クローン病では40,885人と炎症性腸疾患の罹患は増加し続けている。しかしながら、炎症性腸疾患を専門的かつ多角的に診療する施設は少ない。炎症性腸疾患は難病であり時として診断、治療に苦渋することがあり、特に中規模病院においては軽症以外の患者の診療を控えることが多い印象である。しかしながら近年、生物学的抗体製剤に代表される新薬が続々と登場し中規模病院でも十分に診療ができるようになってきた。

【方法】当院では他科医師連携、薬剤師、看護師、管理栄養士、ソーシャルワーカーから組織する栄養サポートチームを利用し多角的にIBD診療している。また北里大学病院、大船中央病院IBDセンターに研究日に研修に行き患者相談にのってもらい炎症性腸疾患患者を診療している。また製薬会社の協賛により地域のクリニック、病院との診療連携会をおこなっている。

【成績】炎症性腸疾患患者の外来診療、入院診療が多くなった。炎症性腸疾患患者の情報誌CCJapan、情報サイトIBDプラス、炎症性腸疾患協会から取材、掲載を受けるようになった。多くの炎症性腸疾患のエキスパートから診療指導をうけ診療の質があがった。相模原市の市長より疾病対策課の勤務を任命された。

【結論】炎症性腸疾患患者を積極的に診療していくことは地域医療貢献できると考える。

O-273

多発性骨髄腫患者におけるダラツムマブのinfusion reaction発現調査と時間短縮投与の試み

兼松哲史¹、中村英明¹、伊藤貴彦²

¹JCHO 可児とうのう病院 薬剤部、²血液内科

【目的】ヒト抗CD38モノクローナル抗体であるダラツムマブ（以下、DARA）は再発または難治性の多発性骨髄腫に使用される。DARAは高い確率でinfusion reaction（以下、IR）が起こる可能性がある。そこで今回、DARAのIR発現に関して調査を行った。また、当院ではDARAの投与時間を適応外へ短縮し投与を行っているが、IR発現は投与速度上昇に伴い増加することが知られており、時間短縮投与の安全性、特にIR発現についても合わせて報告する。

【方法】2018年1月から10月までの10ヶ月間に当院において多発性骨髄腫にてDARAを投与された患者を対象とした。DARAは100mL/hで開始し、以後1時間毎に50mL/hずつ最大200mL/hまで速度を速める点滴方法が適応内における最も速い投与速度であるが、当院では2018年9月よりDARA3回目投与以降に最終速度が200mL/hでIRが認められなかった患者に限り、4回目投与以降の投与速度を200mL/hで開始し最後まで行うこととした。また、前投薬を内服し60分経過後にDARA投与開始のところを30分後に開始することとした。これらDARAの点滴速度上昇、および前投薬の投与スケジュール変更を時間短縮投与と定義した。IR発現については電子カルテよりレトロスペクティブに調査を行った。

【結果】DARA投与患者は9例であり、初回投与時のIR発現はGrade 0が3例（33.3%）、Grade 1が2例（22.2%）、Grade 2が4例（44.4%）であった。2回目投与以降は初回投与時Grade 1のIRが発現した1例に3回目投与時のみGrade 2のIRが発現したが、他はIRが発現しなかった。時間短縮投与に変更した患者は4例（44.4%）であり、変更後にIRが発現した患者はいなかった。

【考察】DARA初回投与時のIR発現頻度は66.7%であり、これは臨床試験における初回IR発現頻度の45.6%より多かった。また、時間短縮投与へ変更後にIRが発現した患者はいなかったことから、時間短縮投与は患者にとってIRに関して安全に施行でき、時間的負担を軽減する投与方法であることが示唆された。

O-274**里帰り出産褥婦EPDS高得点者への早期介入後の実態調査
～里帰り出産と産後うつ病との関連性についての考察～**

濱洲由貴、鈴間利江子

JCHO天草中央総合病院 看護部

【はじめに・目的】産後うつ病は、産後2～4週間頃から始まることが多く、発症率が10-20%と高く、育児に支障をきたした子供の発達に好ましくない影響を及ぼすため予防と早期発見が重要である。A病院では、産後うつ病予防の為に継続支援が必要な対象を、地域の保健センターへ情報提供している。その中には里帰り群も含まれていた。本研究は、里帰り出産と産後うつ病との関連性および、里帰り群に対する早期発見・早期介入が、産後うつ病の予防につながることを明らかにするために実態調査を行った。

【方法】平成28年と29年にA病院で出産した褥婦に対しEPDSを用いた調査と里帰り群2週間健診EPDS高得点者に対する早期介入を行った。

【倫理的配慮】EPDS記入をもって同意を得たこととしデータからは個人が特定できないよう配慮した。

【結果】里帰り群の2週間健診EPDS高得点者は、全例が早期介入後に得点低下につながった。介入ありとなし2群間でも有意差を認めた。しかし、1か月健診EPDS高得点者の里帰り群と非里帰り群の2群間と、平成28年と29年のEPDS高得点者2群間の比較で有意差を認めなかった。

【考察】早期介入あり、なしの2群間に有意差が認められたことから早期発見・早期介入は産後うつ病予防に効果があったと考える。しかし、里帰り群と非里帰り群の2群間と平成28年と29年の2群間では有意差が認められず、里帰り群のみに早期介入を行っても全体のEPDS高得点者の数に影響はなかった。しかし、里帰り群は自宅へ戻ってからが産後うつ病の好発時期であるため、地域での産後ケアなどの社会的支援が重要になってくる。

【結論】1.早期発見・早期介入は産後うつ病予防に効果があった。2.里帰り出産と産後うつ病の関連性を明らかにできなかった。3.各地域での産後ケア事業の体制整備が望まれる。

O-275**産科外来における保健指導の実態調査
～妊娠期から産後までの継続的支援について～**

吉田恵巳、金森真未

JCHO相模野病院 看護部

【背景と目的】女性の社会進出で晩婚化や高齢出産、少子化が深刻な社会問題となっている。本研究では保健指導の実態調査により、現状を把握すると共に、対象となる妊婦にとってどのような支援が必要か探り出し、具体的な支援につなげていくことを目的とした。

【方法】平成30年8月～11月 A病院で分娩予定の妊婦106名当院で保健指導の際に使用している問診表を配布し記入して頂き、精神面やスタッフに望むことを自由記載とした。A病院の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】同居家族は夫と同居44%、夫・子と同居40%、パートナーと同居1.2%、一人暮らし14%、その他9.4%という結果である。二人以上の大人の同居者がいる割合は全体の7.4%であった。サポートの有無は、有り92%、無し5%、未定9%であった。対象者の中で妊娠期から継続的に支援が必要となるケースは18人(16.9%)。精神的な既往がある対象者は8人であった。

【考察】外来での関わりは、心身ともに安全・安楽に妊娠分娩が経過出来るよう、初期からの保健指導を十分に行い、異常の早期発見と合併症の予防、対象との良好な信頼関係を築きあげることが大切である。高齢初産婦は身体的、精神的、社会的リスクが高いため、妊娠中から分娩、産褥、育児までの円滑な母子関係の確立、母親役割の獲得を支援して行く必要がある。

【結論】産後の早期介入と地域へつなげることが効果的な支援となり、産後のサポート体制の充実につながっていく。